



埼玉PHP「ほ」友の会

(埼玉PHPほんどうの時代友の会)

会報 9月号

毎月15日発行 (通巻51号)

発行日 平成27年 9月 15日
発行 埼玉PHP「ほ」友の会
発行人 会長 笠原 三郎
編集担当 小林 澄夫
(企画・文責)

◆『28年度 9月定例会』報告

(当会は7月から新年度です。)

- 1、日 時 平成27年9月5日(土) 13:00～16:00
- 2、開催 場所 桜木公民館5F 講座室①
- 3、出席 者 鈴木(彰)、鈴木(園)、笠原、青山、鈴木(美)、上田、小西、山下、水澤
佐藤、樺澤、宮田、阿部、堀口、平岡、加藤、海藤、斎藤、小林

《敬称略・順不動》参加者計 19名

本日のプログラム < 進行担当:阿部氏 >

13:00～

・「私たちの信条」「五つの誓い」「立腰と瞑想」 ⇒<担当:事務局・斎藤氏>

13:05～13:10

・「会長あいさつ」 ⇒ 笠原会長

～3分間スピーチはお休みです。～



9月定例会の出席者一同

後列左より 山下、小西、上田、海藤、堀口、平岡、水澤、小林、加藤、鈴木(彰)、宮田

前列左より 樺澤、青山、鈴木(美)、佐藤、笠原、阿部、鈴木(園)、斎藤

— 敬称略 —

◆ 9月定例会のメイン

私の本棚から「この一冊をお薦めします！」③

(発言者の敬称略)

このテーマは9月定例会の定番となり、今年で3年目になりました。

我々が生活していく中で、読書することは、「知識の蓄積」、「心の癒し」、「精神の安定化」そして「表現力・想像力のアップ」等々にメリットがあり、我々の心を豊かにしてくれます。

会員の書籍に対する関心度が高く、多数のご意見をいただきました。そのため紙面が相当なボリュームとなりますので、会報への掲載は9・10月号の2回にしました。また各ご意見の内容を多少要約いたしました。ご理解のほどをお願いいたします。

第1回目の掲載

平岡 信行

「林住期」

五木 寛之著

<幻冬舎>

林住期

五木寛之



人生を「学生期」(青少年時代学習し体験を積む時代)・「家住期」(就職、結婚して家庭を作り子供を育てる時期)人生前半の50年である。そして第三の人生となる「林住期」「遊行期」となるが、特に人生のクライマックスである50～75歳までの黄金期である「林住期」をいかに生きたか…が、その人の運命を決める。
死は背後に音もなく忍び寄ってきて、ポンと肩を叩いて「時間ですよ」と不愛想に知らせる。「死は前から来ない。」よく生きたということは、最後をよく締めくくってこそ、良き人生といえる。
どんなに華やかに生きたとしても、最後に無残な死を迎えて苦しむのでは、到底良く生きたとは言えない。…となかなか含蓄のある内容で、今後、私の人生訓としていきたい…と思っている。

「世界恐慌への序章

水野谷重雄

最後のバブルがやってくる」

岩本 沙弓著

<集英社>

最後のバブルがやってくる

世界恐慌への序章

岩本沙弓



世界中が金余り状態で、お金の行き先が株や先物等の投資に向かう。2017年頃までバブルが続く。その後、弾けて大不況になり経済体制が新しくなるだろう。アメリカも金本位体制一部復活等、混乱は続く。
近未来経済予想誌。12年発行と古いが、そう言っている内容を、15年の現在と比較できる。比較して欲しいのは、12年当時、円相場が80円、株価が15,000円から今日の数字を予測している点が卓見である。著者は経済の歴史、国際情勢等々を踏まえて記述している。投資を勧めているのではない。今後の経済状況を知る上で、大いに役立つと思っている。小生もそう思っている。20年オリンピック前後までバブルが続く、その後は？…。
ぜひ、ご一読をお勧めしたい。

<定例会欠席>

樺澤 邦子

「生き方」

稲盛 和夫著

<サンマーク出版>

生き方

稲盛和夫

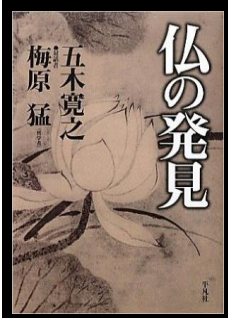
私の家の茶の間には、あらゆるジャンルの本が数十冊並んでいる。その中の一冊の本が目について。それが京セラ設立者の稲盛和夫著のこの本である。私自身、彼岸の世界へ近づいている齢となり、残された人生の生き方として、大切なことを知りたかったのである。真にシンプルで当たり前のことだが、よく考えてみると奥深いことなのである。「よい心を持ち世のため人のために、善き思い、善き行いに努め正しく生きる。」ということなのである。「そのような生き方をすれば、光り輝く黎明の時を迎えることができる。」と私は信じている。著者の結びの言葉であった。黎明の時とは…？何度も思いめぐらした。それは善き心、美しい心で最後に旅立ちができることと解釈したが、…生き方の指針となる大切な本である。
もう一冊、向田邦子の「父の詫び状」である。無造作にページをめくる。彼女とは同世代であり、昭和の香りも記憶もすべての位置が同じである。奇しくも私の誕生日(8月22日)に亡くなり、名前は邦子と同じである。

上田浩一郎

「仏の発見」

五木寛之・梅原猛 著

<学研文庫>



少年期に終戦による北朝鮮からの帰還の過程で地獄を体験した五木寛之氏と、私生児としての境遇を過ごした梅原猛氏の宗教(仏教)を通しての対談である。本来、五木氏は小説家、梅原氏は哲学者であるが、互いにその領域を超えて、冥界について聖徳太子、法然、親鸞、蓮如等はどう向き合ってきたのか…の対談内容の濃さには圧倒された。「人はなぜ人を殺してはいけないのか。」をテーマに日本人の信仰の原点を探り、内在する心の状態の把握の追求は、二人の原体験も通して迫力ある対談内容となっている。又、近年では太宰治、芥川龍之介、川端康成等は単なる自殺した小説家としてしか認識していなかったが、彼らがいかに俗界と摩界の狭間で苦悩したかを知る事ができた。俗界で殆ど何も考えてこなかった当方も、一般的に言えばあと十数年で終焉を迎える。最期が近づくにつれ心穏やかになり「仏」の心である世に旅立ちたいとの思いを一層強くした。日本人として選択肢の多々ある仏教(神道含む)中心の社会で生を受けた事は、幸せであったと再認識させてくれた書であった。

水澤 尚之

「吉野 弘 詩集」

吉野 弘著

<角川春樹事務所>



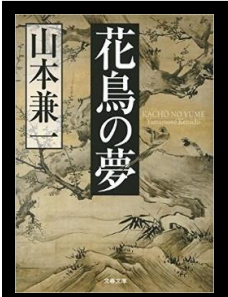
いわゆる、“詩“らしいものから全く離れた詩を書く詩人の吉野弘さんの詩集。難しい言葉をほとんど使わず、ごく平易な言葉で日常的な出来事とか、人間のありようを、意外なアングルからとらえて、緻密に、またユーモアを持って、時には少し残酷に、さらっと表現されている文体。私自身、詩の概念は、メルヘン的なもの、またはリズムミクなものと思っていたが、吉野さんの詩を読んで非常に新鮮な感覚を覚え、また日本語という言葉のおもしろさ、豊かさ等を改めて認識した。全体的に楽しいものが多いが、特に印象に残るものは、I was born、夕焼け、祝婚歌等である。

海藤 太

「花鳥の夢」

山本 兼一著

<文春文庫>



山本兼一の作品に懲って、刀鍛冶ものの「いっしん虎徹」、山岡鉄舟を主題の「命もいらすもいらす」ほか、「火天の城」、「雷神の筒」、「利休にたずねよ」、「おれは清磨」等々、いろいろ作品がありますが、それぞれ一人の人物像を描いたものです。その中でも狩野永徳と長谷川等伯との対決の「花鳥の夢」が面白い。この本の内容を理解するには、葉室麟著「乾山晩愁」の中の「等伯慕影」や安部龍太郎著「等伯」を合わせて読むと良くわかります。狩野派4代永徳は、祖父から英才教育を受け、10歳代で父親を超え、信長の安土城の襖や壁に絵を描いた。また秀吉の聚楽台に描いた「洛中洛外図」は、信長が買い取り上杉謙信に送ったものであり、今現在も米沢市にある。しかし一派を支える心労がたたり48歳で没す。一方、能登から出てきた天才長谷川等伯は、永徳に意地悪されながらも京都で人気を博し、家康に招かれ江戸へ行くが73歳で没する。因みに私は等伯のファンです。

宮田 博光

「喜知次」

乙川優三郎著

<講談社文庫>



派閥抗争が渦巻く東北のさる藩の舞台に3人の若者の成長を描いた内容です。祐筆筆頭日野弥左衛門の息子小太郎(のちの弥平治)、郡奉行の次男・牛尾台助、そして下士の家に生まれた鈴木猪平の3人である。私がこの本の中で気に入った場面があります。……2ヶ月ほど前、藩の江戸屋敷が消失し、その折、二親を亡くした6歳の女の子が日野家に引き取られてきた。名前は「花哉」といい、目の大きい女の子だったので、小太郎があだ名を「喜知次」と付けた。喜知次とはこの土地ではありふれた魚の名で、成魚はアカシとも呼ばれ目が異様に大きく見える魚です。その喜知次(花哉)と弥平次との儂い恋物語です。「夜(よ)ぐたちに寝覚めて居(お)れば川瀬尋(と)め ころもしのに鳴く千鳥かも」夜更けて寝覚めている、川の瀬を探して心もしおれるほどに千鳥のなく声が聞こえる。…とという孤独な歌である。

阿部 勝

「一人ぼっちを笑うな」

蝦子 能和著

<角川書店>



私は暇にまかせて読む雑読ですから、特に教養として身につく様な本は読んでおりません。最近読んだ本はこの本です、読んでいううちになんとなく共感するところがありました。この本で私なり学んだことは、人は自由に生きていきたいのが本性です。しかし、社会人として生きていくにはルールがあります。それは、

- ・自分が、されて嫌だと思ふことは他人しない。
- ・誰かが気分を悪くするようなことはしない。
- ・自分は特別人でなく普通人であればいい。

最低限これだけを守れば、「一人ぼっちを笑うな」と自分に言い聞かせながら、周りを気にせず楽しく生きて行けるのではないかと感じました。

各人、表情豊かに書籍の紹介！



小西 憲二 『「がまん」するから老化する』 和田 秀樹著 <PHP新書>



タイトルに引きつけられ思わず購入。
 著者は老年精神医学が専門の医者であり、二十年以上に渡る高齢者の臨床経験から、これまで言われてきているアンチエイジングの常識に疑問を投げかけている。メタボはうそ（これは肉食の欧米人対象の提案。）で、日本人はもっと肉を食べて良いとか、無理なダイエットや節制は老化を加速するとか、コレステロールは本当に悪いのかなど。老化とは何かからはじまり、老化予防・アンチエイジングにつき提案している。人は感情・心から老化し、体も心も使わないと退化するということを強く述べている。さらに、年を取るほど使わないことによる衰えがひどくなる…と。好奇心を失わず、心を若く保つことが大切なようだ。心の若返りには外見の若返り(オシャレ)や人付き合いも大切との事。生活習慣病について、一般的に言われていることをそのまま受け入れるのではなく、複眼的に眺め直してみると、新たな気づきがあるかも知れない。

斎藤 克己 「風邪の果て(上・下)」 藤沢 周平著 <文春文庫>



身分差のある18歳の剣術道場同期5人の権力闘争を織り込んだ成長と友情、反感の物語。厄介叔父として残った1人から果し合いを申し込まれる。何故、果たし合いを望んだのか。意味を慮りながら、剣術修行の18歳から藩筆頭家老に登り詰めるまでのことを思い起こす。相手と話し合わなければならないと考え手を尽くすが、会えぬまま5日間が過ぎ果し合いの当日を迎え、勝利する。
 身分差のある5人のそれぞれ生き方を描いているが、権力闘争がメインの物語だと思う。権力を掴んだ者のむなしさ。主人公は貧しくても、平々凡々懸命に生きるものの満足感を感じるが、はたして当人はどのように感じているのか？自分も古希を迎えようとしているので、どのような人生が幸せか、考えるのに良い本である。波乱万丈、平々凡々どちらも満足出来ないのではない。誰もが人生において満足できず、後悔のような感情を持つものだと思う。
 藤沢周平は文章はうまいし、考えさせられる本が多いよね。

小林 澄夫 「天国までの百マイル」 浅田 次郎著 <講談社文庫>



事業に失敗し、愛する妻子とも別れたダメ中年の主人公。重い心臓病を患う老母を乗せて、天才心臓外科医がいるという病院までポンコツ車で100マイルをひた走り、やっと何とか病院に到着した。主人公の母への愛情、水商売のマリとの関わり合い、そして別れた元妻の心遣い等々…、すべての人たちの思いとともに辿りついた先には、切ない奇跡が待っていました。思わず涙ぐみました。
 ジャンルが広い著者の作品は、どれを読んでも場面展開も早く、たくさんの登場人物を動かし、ときおり独白も挟んだりして読者を飽きさせない。セリフも素晴らしく文章に快いテンポがあるので、読むことを中断することができないほど読み易い。従って、著者の作品はいつも一気読みです。

佐藤 秀子 「佐治敬三と開高健 最強のふたり」 北 康利著 <偕成社文庫>



寿屋(株)の初代社長鳥井信治郎の奮闘の様子は、朝ドラのマッサンが作るウエスキーで知られています。赤玉ポートワインが当たってその資金でウエスキーづくりに投入します。後継者長男吉太郎は社長の器でしたが、31歳で心臓病喘息で亡くなってしまふ。ウエスキーへの資金が底をつき、次男敬三を佐治家の養子として、佐治家から多額の援助を受け乗り切った。敬三(大正8生)は昭和29年7月山崎隆夫を部長として宣伝部を創設。この宣伝部は開高健(S5生)、柳原良平、坂根進、杉本直哉の個性的サムライメンバーで、トリスパーの発展へと進み、「アングル・トム」、「人間」らしくやりたいサ…のコピーが生まれた。敬三・開高健の強い結びつきの始まりとなる。ふたりは、傷つきやすく繊細な神経と触れられたくない心の傷を抱えていた。
 開高健(平成元年12月死去)の告別式に「会えばともに酒を飲み、語り合える畏友であった君の…あの特徴のある声がかもう聞けないか」と思うと…残念でなりません…の弔辞をおくった。敬三はしゃくりあげるような号泣しつつ。

★ 編集室より

今月のメインテーマ、私の本棚から「この一冊をお勧めします！」の第二回掲載は、次号10月号を予定しております。
なお、10月定例会の開催が10月18日（日）ですので、10月号の会報発行は10月末日頃になります。

15:35～

「次回定例会の案内」及び「各種情報交換」⇒笠原会長・野外活動担当：上田氏

15:45～

「閉会のあいさつ」 ⇒加藤顧問

15:50～

「出席者全員集合写真」

○ 閉会后、有志による懇親会を開催いたしました。

(参加者12名)

●●情報の窓●●

○10月3(土)～4日(日)に全国PHP友の会・全国大会(郡山大会)が開催されます。

全国大会には、当友の会関係から笠原会長(夫妻)、平岡氏、加藤氏、吉川氏、中山氏、上田氏、佐藤(秀)氏、内波氏、小林、またむさしの友の会関係から河本氏、瀬川氏が出席予定です。

○「PHP誌/読者の集い」及び「PHP友の会/新入会員の集い」のご案内

埼玉県内在住の「PHP誌」読者及県内の「PHP友の会」へ昨年及び本年に入会した方々にお集まりいただき、PHP活動内容の説明会と仲間の皆様との交流していただく企画を立案しているところです。誰でもお気軽に参加できますので、ぜひこの機会にご参加ください。

・日 時 12月5日(日) 9:30～11:45

・開催場所 生涯学習総合センター・学習室②(シーノ大宮センタープラザ9F)を予定。
さいたま市大宮区桜木町1-10-18(大宮駅西口から徒歩5分)

なお、当日午後から当会定例会がありますので、ぜひ会員の皆様も参加し盛り上げていただきたく、お願いいたします。

○10月の定例会(野外活動)は、第3日曜日の10月18日(日)になります。

10月3～4日にPHP全国大会(郡山大会)が開催されるためです。

10月定例会の日程をお間違いなく！ ご注意ください。

ムラサキシキブ ⇒

(紫式部)

クマツヅラ科、花は淡い紫色で果実は9月～10月頃つける。
平安時代の女流作家・紫式部になぞらえて付けられた。花言葉は「聡明」。



◆ 28年度・10月定例会のご案内

(当会は7月から新年度です。)

埼玉PHP3友との合同開催

野外活動

国指定重要文化財

「旧三河島汚水処理場唧筒(ポンプ)場施設」の見学と

国指定名勝

「旧古河庭園(西洋庭園と日本庭園が調和)」の散策

- 1、日 時 平成27年10月18日(日) 9:30~15:00
- 2、集合場所 JR京浜東北線 王子駅中央改札口(都電停車場口) **9:30 (厳守)**
- 3、行動コース 都電王子駅9:45頃…都電⇒10:15荒川二丁目…徒歩3分⇒「旧三河島汚水処理場唧筒(ポンプ)場」<見学時間約1時間40分>…⇒荒川二丁目…都電⇒12:40都電王子駅…徒歩⇒13:00飛鳥山公園(昼食)13:50…徒歩⇒14:10旧古河庭園(約40分散策)……15:00現地解散

国指定重要文化財「旧三河島汚水処理場唧筒(ポンプ)場

隅田川中流に位置しわが国最初の近代下水道処理場で、高い歴史的価値が認められ平成19年に国指定重要文化財に指定されました。阻水扉室、沈砂池などの一連の構造物が旧態を保持して残っており、近代下水道処理場唧筒場施設を知る上でも重要な文化財です。



国指定名勝「旧古河庭園」

武蔵野台地の斜面と低地という地形を活かし、北側の小高い丘には洋館を建て、斜面には洋風庭園そして低地には日本庭園を配したのが特徴です。この庭園はもと明治の元勲・陸奥宗光の別邸でしたが次男が古河財閥の養子になった時、古河家の所有となりました。

散会后、ご都合の良い方による懇親会(15:30頃開宴)を開催予定しています。

懇親会々場は、王子駅近くの中華料理「菜菜香」(貸切)で開催します。

食べ放題、飲み放題 男性3,500円・女性3,000円 Tel 03(3914)8501

* 『28年度・10月定例会』への参加 出・欠のご連絡は、早目をお願いいたします。

●定例会&懇親会の出・欠の連絡

・斎藤事務局長 TEL 048(297)0631 携帯 090(2765)2519

e-mail: asaitoka0631@m8.dion.ne.jp

●その他の連絡先

・笠原会長 TEL 048(649)7838<FAX併用> 携帯 090(4363)3639

e-mail: bubu862000@aa.cyberhome.ne.jp

・小林会長代理 TEL 048(883)2918<FAXなし> 携帯 090(7728)8857

e-mail: sumi-koba-92171@lagoon.ocn.ne.jp